

2024 年度（令和 6 年度）

事業報告書

— 2025 年 5 月 22 日 —

公益財団法人国際高等研究所

2024 年度
事業報告書

— 目 次 —

I. 事業活動	1
『1』 研究運営体制と活動	1
『2』 研究事業	3
『3』 交流事業・人材育成事業	6
『4』 成果の発信と広報活動	12
『5』 他機関との連携活動	13
II. 法人運営	14
『1』 評議員会、理事会の開催状況	14
『2』 松本紘所長の任期満了に伴う所長選考について	14
『3』 高等研施設の利用促進	15
『4』 資産運用委員会における審議	15
III. 2024 年度（令和 6 年度）収支決算	16
『1』 資産運用について	16
『2』 貸借対照表	16
『3』 正味財産増減計算書	17

公益財団法人国際高等研究所
2024 年度（令和 6 年度）事業報告

未知の感染症による世界的蔓延（パンデミック）が、人類に未曾有の危機をもたらせることを経験した。世界が繋がる今日では、世界的な社会・経済活動に大きなダメージを与えた等、人類社会の持続可能性を揺るがしかねない様々な問題を惹起していると言え、今後には大きな課題を残している。

一方、人類が共通して希求する世界平和も、一部の地域で勃発した領土紛争によって踏みにじられ、貴重な歴史的・文化的な価値や遺産は都市とともに破壊され、多くの難民を生む結果となっている。安全保障上の国際的な政治問題は解決の糸口が見い出せないでいる。また、地球温暖化によって危惧される地球環境の激変も、持続可能社会の実現にとって大きな障害となり得るものである。

これらの人類的課題は、元を質せば人間自らがもたらせた原因に由来するとも言えるのではないか。人間回帰に立ち返り、地球社会の持続可能性を脅かすであろう世界的危機への適応性や回復力を人間が獲得し、それへの適切な対処法を、グローバルな観点から探究することは、学術研究機関である公益法人としての高等研に課せられた大きな責務であることを痛感したところである。パラダイムシフトが要請されるこれからの新たな社会像を求め、人類社会の持続可能性についての根源的な課題を学術的に探究し、混迷する世界への处方箋を世界に向けて発信することが、高等研に課せられた喫緊の課題に他ならない。学術機関としての使命が問われている。

以上のような新たな研究戦略の意義及び事業活動を進める背景を踏まえ、2024 年度の事業活動は、学術研究機関として学術研究に課せられた責務を果たすべく研究者の結集を図る研究事業を中心に据え、「けいはんな万博 2025」のテーマにも繋がり得る若手研究者の育成を狙う方策の具体化を図る必要がある。さらに公益法人としての使命として、一般の住民を対象とする公開事業の充実・強化を推進するものとした。

2024 年度は高等研創設 40 周年にあたり、分野を越えた研究者が自由な立場で一堂に会し、討議することを旨とする高等研の趣旨を踏まえ、広く社会の動向を見極めながら事業展開を図るとの目標を掲げて高等研の各種事業活動を進めた。

2024 年度事業報告は下記のとおり。

I. 事業活動

『1』 研究所運営体制と活動

1. 研究所運営体制

2024 年度研究所運営体制は下記の通り。

なお、所長、副所長及びチーフリサーチフェローの任期は 2023 年 6 月 1 日から 2025 年 3 月 31 日までの 1 年 10 か月。

(1) 研究所長

松本 紘 理化学研究所名誉理事長
京都大学第 25 代総長・名誉教授

(2) 副所長の委嘱

- 小寺 秀俊 京都大学名誉教授・特任教授
大阪大学特任教授
文部科学省技術参与

(3) チーフ・リサーチフェローの委嘱

- 有本 建男 政策研究大学院大学客員教授
International Sience Council(ISC)フェロー
科学技術振興機構参与
- 高見 茂 京都光華女子大学学長
京都大学学際融合教育研究推進センター特任教授

(4) 主席研究員

- 鈴木 晶子 京都大学名誉教授

(5) 客員研究員・特任研究員の委嘱

- 1) 客員研究員 加納 圭 滋賀大学教育学系教授
駒井 章治 東京国際工科専門職大学工科学部教授
宮野 公樹 京都大学学際融合教育研究推進センター准教授
- 2) 特任研究員 秋山 知宏 神戸情報大学院大学情報技術研究科客員教授
京都光華女子大学研究職員
金澤 洋隆 祇園町醫院医師、徳洲会生駒市立病院非常勤医師
児玉 菜 京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程
真鍋 公希 中京大学現代社会学部講師
山根 直子 京都大学人文学連携研究者・同志社大学非常勤講師他
渡辺 彩加 京都大学学際融合教育研究推進センター技術補佐員
同大学東南アジア地域研究所連携研究員

2. 研究業務連絡会の活動

所長、副所長、チーフ・リサーチフェロー、客員研究員及び連絡会運営事務局をメンバーとする研究業務連絡会を 2023 年 6 月に設置し、高等研の事業運営全般に係る推進方策の検討を行っている。

2024 年度開催状況は下記の通り。

- 研究業務連絡会：5 月 17 日（金）
- 研究業務連絡会：6 月 19 日（水）
- 研究業務連絡会：7 月 26 日（金）
- 研究業務連絡会：9 月 13 日（金）
- 研究業務連絡会：10 月 30 日（水）
- 研究業務連絡会：2025 年 2 月 19 日（水）

『2』研究事業

1. 総括

国際高等研究所は、1984 年の創設以来、「人類の未来と幸福のために何を研究するかを研究する」ことを基本理念とし、学問分野の壁を越え研究者が結集して、人類社会が直面する諸課題に関する学際的研究を進めている。学問領域や専門分野のみならず、世

代、組織、国籍を越え、研究者が横断的に集い研究を進めるという特徴（Beyond Boundaries）を、創設以来今まで継承している。

高等研は、けいはんな学研都市地域という日本が培ってきた歴史、文化、芸術、技能、風土と先端研究とが交差する環境の中にある、この地域の住人や職業人と物理的にも心情の面でも近い。人間や人々の生活を意識しながら、学術研究に基づいて、課題の発見から解決までを総合的に取り組むことができる位置にある。

このような特徴を生かした研究を行い地域社会に貢献するとともに、学術研究や社会のあり方を考え、次世代を担う若者が希望を持てる未来社会の実現に向け研究活動を進めていく。

2024年度は、2023年度に発足した自主研究3件と公募研究1件を推進した。また、研究企画推進会議は2024年度で第5期を終えるため、第6期に向けた体制を整えた。新たな研究者制度に係る検討も行った。

2. 自主研究 (詳細は付属明細書1を参照)

自主研究は、高等研の中核を成す研究である。高等研が主体的に人選した研究代表者が中心となり、研究グループを構成する。3件の自主研究のうち、以下の(1)は副所長が、(2)(3)はチーフリサーチフェローが研究代表者となり、6~7名の研究者からなる研究グループにより実施されている。

(1) 「科学技術の動向とロボティクスの将来—ロボティクスと家庭の関係—」

研究代表者：小寺 秀俊 国際高等研究所副所長

(京都大学名誉教授・特任教授、大阪大学特任教授、文部科学省技術参与)

理化学研究所やATR（国際電気通信基礎技術研究所）等により研究開発されたロボットやその関連技術は、人々にどう受け止められ、社会でどのように受容されていくのか。本自主研究では、ロボットの社会受容の部分に焦点を当てた研究を実施する。

2024年度は、ATR等で開発された人型ロボット（Shosa所作）との対面体験ワークショップを開催（11月）し、介護ロボットの研究者を招いた研究会（1月）を行った。ワークショップでは人型ロボットと人間とのコミュニケーションの実態調査を、研究会では介護ロボットの開発状況と日常生活への導入における課題について議論を行った。

Shosaと対面した人々の多くは、最初は不気味さを覚えるが、そのうち親近感がわいてくる。人間は向き合った相手に対し、8割の模倣と2割の自己表現をすると強い対話感が生まれる、という研究成果がある。それに基づき、Shosaに、8割の真似と2割のランダムな動きをさせているのだ。折しも、2025年4月に大阪・関西万博が開幕、Shosaが展示されている。今後は、2024年度の研究活動に加え、万博での人々の反応も捉えた上で、日常生活におけるロボット技術と人々との関わりについて、まとめていくことになろう。

本研究は、高等研のみでは成り立たない。小寺研究代表者は理研ならびにATRでも研究を継続しているため、実施できる研究となっている。

(2) 「持続可能でレジリエントな社会実現に向けた学際共創の方法の開発と実践研究」

研究代表者：有本 建男 国際高等研究所チーフリサーチフェロー
(科学技術振興機構参与、政策研究大学院大学客員教授、国際学術会議
(ISC)フェロー)

研究副代表・実行責任者：宮野 公樹 国際高等研究所客員研究員
(京都大学学際融合教育研究推進センター准教授)

これまでの高等研の研究・交流活動は、多くがテーマ先行型であり、「人類の未来と幸福のために何を研究するかを研究する」の理念に照らし何らかのテーマ設定を行ったうえで、実施されてきた。このような 40 年にわたる高等研の歴史のなかで、本自主研究はテーマありきではない点において、特異な特徴を持っている。

本研究はテーマ探索型であり、探索活動そのものが主軸である。すなわち、「何を研究するかを研究する」という研究プロセスにおいて重要な営みを、組織として実現することにダイレクトに挑む研究である。こうしたボトムアップでのテーマ探索活動の実施により、将来を見据えた重要な研究テーマの発掘とそうした研究を実施できる人材の支援を行う。

具体的には、全国 9 地区において、「全国キャラバン 3QUESTIONS」と題するポスター発表大会を開催する。そこでは、研究者は 3 つのこと—何を知りたいか・そのために何をして（しようとして）いるか・皆への問い合わせ—についてポスターに自由に表現する。それらを見ながら、4 日間にわたり、研究者や市民、さまざまな業界の人々が集まり議論を行う。その記録を小冊子『となりの研究者』として発行する。

2023 年 3 月の中国地区開催を皮切りに、2024 年度は、北海道(10 月)、東海(11 月)、北信越(12 月)、四国(12 月)の 4 地区で開催した。各地区 100 名弱の研究者のポスター発表と、200 名前後の来場者があった。小冊子も徐々にできあがってきている。

所属役職や研究分野にとらわれず自由な思考と表現が可能な空間は、現在の日本の学術界において貴重であり、本研究は時間をかけて学術の土壌を耕すねらいがある。2025 年度は、九州・沖縄、東北、関東、関西の 4 地区での開催を予定しており、これをもって全国 9 地区での開催を実現することとなる。

- (3) 「人を健康と幸せに導く「意識」に関する研究—関係性との関連を手がかりに—」
- 研究代表者：高見 茂 国際高等研究所チーフリサーチフェロー
(京都光華女子大学学長)

「病は気から」は誰しも耳にした言葉であろう。私たちの幸せにとって、健康は重要な観点の一つである。その健康は、科学的客観的な学術研究のみで解明できるのであろうか。癌の寛解事例には、時に科学では説明しきれない要素が含まれている。本自主研究のテーマはこの点にある。つまり、病に気（意識）はどう関与するのか。

こうした研究は、疑似科学になり得るとして敬遠されがちであるが、高等研だか

らこそ、科学と非科学の境界線上を研究テーマとすることができます。ただ、疑似科学にならぬよう、本自主研究のメンバーには、指南役の医学者が数名入っている。

本研究では、医師として数多くの患者の治療にあたり、健康と意識の関連に注目している方を研究会に招いた。腕利きの外科医として、癌の手術を積み重ねてきた医師が、やがて、患者の回復力を最大限にするために、心の持ちようが如何に大切なことを実感していく。その過程をお話しくださった。こういった講演に照らした議論と併行して、研究メンバーによる内外の研究論文の分析を行っている。

本研究の一環として、2025年6月14日、けいはんなプラザにて、シンポジウムを開催する。「けいはんな万博2025」のウェルビーイングフェスのイベントの一つでもある。シンポジウムでは、3名の医師の講演後に、参加者を含んだ意見交換を行う。これらも踏まえ、研究報告をまとめていく。

3. 公募研究

(詳細は付属明細書1を参照)

公募研究は外部の研究者が構想する研究である。その目的は、次世代の学術の芽の発掘と支援、研究活動の多様性の確保、研究者ネットワークの醸成であり、それらを通じた学術研究への貢献を目指している。

2024年度は、2023年度の研究公募の振り返りを行った。その結果、今後は、高等研の活動全体のなかでの研究公募の役割を再検討し、必要に応じ、その意義と方法を明確にしたうえで実施することとなった。

(1) 「グローバルな分配的正義を促進する科学システムと科学者の役割に関する研究」

研究代表者：新福洋子(広島大学大学院医系科学研究科教授)

本研究の代表者は、医療従事者として、アフリカで医療にあたった経験を持っている。そういった経験が本研究のテーマ設定において、動機の一つとなっている。視界が常に世界であることも代表者の特徴であろう。

コロナ禍におけるコロナワクチンの浸透を振り返ると、早く広く行き渡る地域もあれば、患者が多いのに容易には届かない地域もあり、世界的不平等が起こっていた。本研究がテーマとしているのは、こういった科学技術の成果の人々への分配である。分配にあたり、公正・平等・包括的とはどういうことか、そのために科学者は何ができるのか、を研究している。

2024年度は、国際会議の参加などにより海外動向の調査を行った。それらを踏まえ、2025年9月の研究終了までに報告をまとめる予定である。なお、2024年7月に、妊婦と胎児における先進医療機器や科学技術の有効性の評価をしたタンザニアの研究事例について報告している。(Case study: Digital innovations to improve pregnancy and childbirth outcomes in the Pwani Region, Tanzania, FROM SCIENCE TO ACTION: Leveraging scientific knowledge and solutions for advancing sustainable and resilient development, International Science Council (ISC), July 2024, pp13-14)

4. 研究企画推進会議

(詳細は付属明細書1を参照)

本会議の俯瞰的、長期的視野からの助言及び提言は、研究活動の推進や高等研の将来構想において指針となっている。引き続き、本会議からの助言や提言を研究事業に反映

させることとする。

本会議は 2024 年度を以って第 5 期が終了するため、2025 年度 4 月からの第 6 期に向か、その意義や役割、委員構成について検討を行った。結果、第 5 期の委員 7 名のうち 6 名に再任していただき、第 6 期を始動することとなった。

『3』 交流事業・人材育成事業

高等研における研究活動とともに、一方の事業活動の柱として定着した交流事業の継続性を踏まえた事業企画を進めた。

交流事業においては、世界の最先端の英知を結集し、議論を深め、その活動による研究成果や知的資源を広く社会に発信・還元していくとともに、産・官・学のネットワークとつながり、研究成果が社会に活かされるような事業、社会的な要請やニーズに対応できる事業を積極的に推し進めた。

2024 年度においては、こうした高等研の交流事業の基本を踏まえるとともに、以下の原点をおさえた取り組みを進めた。

【原点】奥田東先生が触発を受け、けいはんな学研都市建設の契機ともなったローマクラブの提言『人類の危機レポート—成長の限界』(1972 年)から半世紀を経た今日、深刻さを増す危機的世界を正視しつつ、けいはんな学研都市の産・官・学のほか住民の皆様との連携をより一層深め、危機意識を共有した上で、「人類の未来を展望した文明論的課題は何か」という問い合わせを掲げる。

1. エジソンの会

(詳細は付属明細書 2 を参照)

「エジソンの会」の活動は、引き続き、世間の関心の半歩先を行くようなテーマを選定し、そのテーマにふさわしい適切な講師に登壇をお願いして、年 4 回の開催を目論むも、第 46 回が台風で延期開催としたため、年 3 回の開催となった。

2024 年度は、前年に引き続き、サイエンスの進歩とそれによるテクノロジーの発展を踏まえて、未来社会の在り方を想定して未来を考える機会とした。

(1) オープン・セミナーの開催

1) 第46回：8月29日（木）国際高等研究所レクチャーホール：台風接近のため延期とし、改めて10月24日（木）に開催した。

テーマ：「ALife（人工生命）が拓く新たな世界～Post AIが問いかける未来～」

講演：「AIとALifeは、どこまで生命か」

講師：池上 高志 東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻教授

講演：「Artificial Life : towards symbiotic intelligence

～知能と人間が共生する社会を目指して～」

講師：岡 瑞紀 筑波大学システム情報系准教授

株式会社 ConnectSphere 代表取締役

インタラクティブ・セッション

上田 修功「エジソンの会」スーパーバイザー

理化学研究所革新知能統合研究センター副センター長

参加者：37 機関、66 名

2) 第 47 回：12 月 6 日（金）国際高等研究所レクチャーホール

テーマ：「宇宙の未来～月/火星への挑戦～」

講演：「宇宙ビジネスの新しい潮流と今後」

講師：中須賀 真一 東京大学大学院工学系研究科航空宇宙工学専攻教授
講演：「月面探査・SLIM～今、最も世界が注目するプロジェクト～」
講師：澤井 秀次郎 宇宙航空研究開発機構宇宙科学研究所准教授
JAXA SLIM プロジェクトチーム プロジェクトサイエンティスト
講演：「深宇宙へ～超小型探査機を太陽系のあらゆるところへ送り込む～」
講師：船瀬 龍 JAXA 宇宙科学研究所教授・東京大学大学院准教授
インタラクティブ・セッション
上田 修功 エジソンの会スーパーバイザー
情報交換会
参加者：28 機関、52 名

3) 第48回：2025年2月5日（水）国際高等研究所レクチャーホール
テーマ：「次世代エネルギー～核融合が切り開く未来社会～」
講演：「地球を救う宇宙の力～核融合エネルギーの革命～」
講師：吉田 善章 自然科学研究機構核融合科学研究所長
講演：「フュージョンによる新たな産業と未来を切り拓く
～京都から世界への挑戦～」
講師：武田 秀太郎 九州大学准教授、京都フュージョニアリング共同創業者
インタラクティブ・セッション
上田 修功 エジソンの会スーパーバイザー
情報交換会
参加者：25 機関、48 名

2. 「ゲーテの会」を中心とする<「新たな文明」の萌芽、探求を！>プロジェクト (詳細は付属明細書2を参照)

当該プロジェクトでは、2022年度（初年度）の「量子論」、2023年度（第2年度）の「文明論」を受けて、2024年度（第3年度）の共通テーマを「生命論」とした。生命科学が神の領域に迫り、情報やAIが社会を支配しつつある中で、新型コロナウイルスによるパンデミックにより、否応なく直面せざるを得なくなった「生と死」の問題に、哲学、宗教学、医学、人類学などの様々な視点から検討して、真に豊かな未来を切り拓くために、「生命（いのち）の輝き」について議論を行った。

（1）満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」

2024年度（第3年度）は、<「新たな文明」の萌芽、探求を！>プロジェクトの共通テーマが「生命論」であることから、次の内容で対話型講演会を開催した。

1) 第94回「ゲーテの会」 -

開催日時：2024年5月23日（木）18:00～20:00
演題：『自心の源底』を尋ねて～空海の生命論への一観点～」
講師：竹村 牧男氏（東洋大学 名誉教授）
開催方式：ハイブリッド（対面・オンライン）方式
開催場所：国際高等研究所 コミュニティーホール
参加者：会場参加 24名、オンライン 86名、計 110名

2) 第95回「ゲーテの会」 -

開催日：2025年2月13日（木）
演題：『直観』から勇気を貰う～自然研究者ゲーテがスピノザに学んだこと～」
講師：吉田 量彦（かずひこ）（東京国際大学商学部教授）
開催方式：ハイブリッド（対面・オンライン）方式

開催場所：国際高等研究所 コミュニティーホール
参加者：会場参加 18 名、オンライン 74 名、計 92 名

（2）meta 鼎談（哲学×科学×技術）

2024 年度（第 3 年度）は、その共通テーマ「生命論」に従って開催する。

1) 第 3 回「meta 鼎談」

期日：2024 年 7 月 13 日（土）14:00～17:00

モティーフ：生命（いのち）の輝きを探る～新型コロナウィルスから学ぶ～
講師：

- ・宗教哲学分野：松山 大耕氏（京都 妙心寺 退蔵院 副住職）
- ・生命科学分野：平野 俊夫氏（大阪大学 前学長）
- ・文化人類学：石井 美保氏（京都大学 准教授）

開催方式：ハイブリッド（対面＋オンライン）方式

開催場所：国際高等研究所 コミュニティーホール

参加者：会場参加 25 名、オンライン参加 62 名、計 87 名

（3）市民懇談（roundtable）

2024 年度（第 3 年度）は、その共通テーマ「生命論」に従って開催する。

1) 第 3 回「市民懇談」

期日：2024 年 9 月 28 日（土）14:00～17:00

モティーフ：生命（いのち）の輝きを探る

モデレータ：加納 圭氏（滋賀大学教育学系教授、高等研客員研究員）

メンター：平野 俊夫氏（大阪大学 前総長、大阪国際がん治療財団 理事長）

開催方式：ハイブリッド（対面＋オンライン）方式

開催場所：国際高等研究所 コミュニティーホール

参加者：会場参加 17 名、オンライン参加 26 名、計 43 名

討論方式：会場参加者を A・B・C の 3 グループに分け、グループ討論と
その結果を持ち寄っての全体討論。三つの論点ごとにそれを繰り返す。

（4）「フォローアップ・WS（ワークショップ）会議」の開催

「ゲーテの会」「meta 鼎談」「市民懇談」に係る講演録等のブックレット化を図り、
本プロジェクトの中心的参画メンバーの自律的学習（市民学習サロン等）の便を図る
とともに、同参画メンバーを中心に「フォローアップ・WS 会議」を複数回開催し、
多様な関係者から、本プロジェクトに関して種々ご意見を頂戴し、それらを基に次年度
の企画内容の充実に繋げている。

2024 年度は、12 月 11 日（水）に「フォローアップ・WS 会議」を開催し、今年度
の振返りと来年度の計画について意見交換した。

（5）「市民学習サロン」の開催

「市民学習サロン」は、「満月の夜開くけいはんな哲学カフェ『ゲーテの会』」、「け
いはんな meta 鼎談」、「けいはんな市民懇談」などで取り上げられたテーマに関心を
寄せる学生・市民有志が、当該テーマ等について、古典、講演録等をテキストとして、
さらに深く自主的にゼミナール形式で学習する学びの場を提供するものである。

2024 年度は、2023 年度に引き続き「古典（ゲーテ『ファウスト（第 2 部）』）を読
む会」を 2 回（第 5 回、第 6 回）開催するとともに、新たに「近代」社会の在り方を

深く考える上で、不可避の古典スピノザ著『エチカ』を、ゲーテ『ファウスト（第2部）』に續いて取り上げることとし、引き続き高橋義人先生にメンターをお願いした。

1) 「古典（ゲーテ『ファウスト（第2部）』）を読む会」の開催

・第5回：4月20日（土）14:00-17:00 参加者：7名、

テーマ：公共事業

・第6回：7月20日（土）14:00-17:00 参加者：6名、

テーマ：最終回（まとめ）

2) 「古典（スピノザ『エチカ』）を読む会」の開催

・第1回：10月19日（土）14:00-17:00 参加者：6名、

テーマ：スピノザの生い立ちからその生涯

・第2回：2025年1月25日（土）14:00-17:00 参加者：5名、

テーマ：スピノザの神学論

3. IIAS 塾ジュニアセミナー及び関連事業： (詳細は付属明細書2を参照)

(1) 2024年夏季ジュニアセミナー：人物学習型

開催日：2024年8月7日（水）～8月9日（金）（2泊3日）

開催方式：対面・合宿方式

プレミーティング（オンライン方式）：7月28日（日）

受講生：高校生21名・大学生1名（京都府4校、大阪府2校、奈良県3校、兵庫県1校 計10校）

宿泊：国際高等研究所住宅施設

① 思想・文学分野

テーマ：「本居宣長」に学ぶ

～「もののあわれを知る」と「漢意」、その多様性と先駆性～

講師：田中 康二 皇學館大学文学部

② 政治・経済分野

テーマ：「大河内正敏」に学ぶ

～「科学主義工業」こそ、産学連携「理研モデル」～

講師：斎藤 憲 専修大学名誉教授

③ 科学・技術分野

テーマ：「梅棹忠夫」に学ぶ

～「文明論的」視点を持って物事を考える。「旅」はその基(もとい)～

講師：小長谷 有紀 国立民族学博物館名誉教授

体験学習（心身の学）：

テーマ：造形作品の共同創作を通じて体得する「もう一つの知、身体知」

講師・創作支援：岡本 道康 森のねんど研究所代表（人形作家）

「森のねんど物語について」

講師・活動支援：村上 忠幸 京都教育大学名誉教授

「マルチプル・インテリジェンスについて」

(2) 2025年春季ジュニアセミナー－人物学習型－：課題探究型の開催企画準備中

開催日：2025年3月26日（水）～28日（金）（2泊3日）

開催方式：対面・合宿方式

プレミーティング（オンライン方式）：3月16日（日）17:00～19:00

受講生：高校生及び大学生概ね20名を公募し、19名が参加

参加費：@1万円（宿泊・食事代向け）

宿泊：国際高等研究所住宅施設

受講生：高校生 17 名・大学生 2 名（京都府 3 校、大阪府 1 校、奈良県 1 校、兵庫県 1 校、東京都 1 校、愛知県 1 校、岡山県 1 校、山口県 1 校、大学 2 校 計 12 校）

① 思想・文学分野

テーマ：「ベルクソン」に学ぶ—「直観」の哲学

～世界の平和と人類の幸福のため～

講師：瀧 一郎（たき いちろう） 大阪教育大学教育学部教授

② 政治・経済分野

テーマ：『岩倉使節団 150 年を機に「日本文明」の再興を考える

—受容する文明から需要ある文明へ—』

講師：瀧井 一博（たきい かずひろ） 国際日本文化研究センター教授

③ 科学・技術分野

テーマ：「応用をやるなら基礎をやれ」化学者たちの京都学派

—福井謙一をはじめとする喜多源逸の後継者たち—

講師：古川 安（ふるかわ やす） 総合研究大学院大学客員研究員

体験学習（心身の学）：

テーマ：「アート思考」への誘い（いざない）

—「対話型鑑賞」と「哲学対話」の協働を通じて体得する

「もう一つの知、身体知」—

講師：戸澤 幸作（とざわ こうさく） 京都市立芸術大学 美術学部 講師

寺元 静香（てらもと しづか） 公益財団法人大原芸術財団

研究員・エデュケーター

なお、2025 年春季 IIAS 塾ジュニアセミナーの開催に当たり、事前トレーニングとして、参加予定のティーチングアシスタント（TA）に対し、「哲学対話」講習会を通じたトレーニングを実施した。

開催日：2025 年 2 月 18 日（火）

場 所：京都市立芸術大学「会議室」

参加者：講師 1 名、TA 6 名（内 1 名は特任研究員）

（3）「ホームカミング」事業

過去にジュニアセミナーを受講した経験者と過去に TA（ティーチングアシスタント）として協力いただいた方々を対象とする「ホームカミング事業」は、第 1 回：2022 年 9 月 17 日（土）18 名参加、第 2 回：2023 年 8 月 26 日（土）12 名参加であった。

2024 年度も、ホームカミング参加者や TA, 特任研究員のメンバーで企画会議を重ね具体的な計画を立案し、以下のとおり実施した。

— 第 3 回ホームカミング —

ホームカミング企画会議：2024 年 12 月 18 日（水）オンライン会議

第 3 回ホームカミング：2025 年 2 月 22 日（土）10：00～17：30

開催方式：対面方式

場所：国際高等研究所 コミュニティホール

参加者：9 名（5 名 + TA4 名：運営メンバー）

使用テキスト：IIAS 塾ジュニアセミナーテキスト vol.02004

「森鷗外に学ぶ～日本にも個人主義はありうるか～」

（著者：高橋 義人 京都大学名誉教授）

（4）「けいはんな文化学術教育懇談会」の開催事業

2019年度から「けいはんな文化学術教育懇談会」を開催し、「IIAS塾ジュニアセミナー」の充実を図る観点からの意見集約を図っている。2024年度は、「IIAS塾ジュニアセミナー」に限らず、「ゲーテの会」を中心とする<「新たな文明」の萌芽、探求を！>プロジェクトなどの運営に関しても、全体会合とともに、文化・学術・教育部会を設置し、専門家の知見を得て、その在り方等について議論する。

2024年度は、来年度ジュニアセミナー開催を休止することもあって、開催を見合させた。

(5) 交流活動内容に係る情報発信

これまでの交流活動で紹介してきた知見を広く一般に公開する取組みは、「交流活動の資料公開」として2023年12月に開始し、2025年4月時点で、IIAS「ゲーテの会」ブックレット42件、IIAS塾ジュニアセミナーテキスト29件が公開済み。毎月の当サイトへの訪問者数は、約150名。

4. 「学生の学生による学生のための教養講座」

学研都市のみならず、関西全体を視野に入れた更なる交流・連携に向けて、13大学・8研究機関が参加するけいはんな学研都市「大学・研究機関」共創会議（座長：松本紘所長）が、2022年12月にスタートし、○けいはんな学研都市の発信力の強化、○大学・研究機関の交流・連携の推進、○学研都市で取り組む最先端研究の「見える化」等の課題を取り組むこととなった。

(1) 「学生の学生による学生のための教養講座」の実施

2023年度において、共創会議の議論の中で「若い世代が、将来、幅広い分野で活躍するために、専門分野以外の多様な人材と交流できる場が必要」との意見が拡がり、高等研が新たな学生向けプログラム「学生の学生による学生のための教養講座」の企画を実施した。目的は、若い世代の人材育成プログラムの展開（持続可能な方式）と高等研及びけいはんな学研都市の事業活動の情報発信である。

2024年度も当該教養講座を実施し、2023年度と同様に、年度末に教養講座の仕上げのイベントとして2025年3月16日（日）に「けいはんな科学コレクション」を開催した。

『4』成果の発信と広報活動

広く社会の動向を見極めながら、高等研における高度な研究活動を踏まえた存在意義の更なる訴求方策の検討（広義の広報活動）を進めることとし、より広く一般を対象とする発信力の強化に努めることは、公益財團法人である高等研にとって社会から求められる要件でもある。

一方、2020年1月に大口の個人寄付金の獲得となつたが、潜在的に社会貢献への強い意志をお持ちの篤志家が居られる状況を踏まえ、高等研の活動成果や存在意義を積極的に社会に訴求する中で、新たな寄付の申し出に繋がる可能性があり得ることを経験したとこ

ろである。

「社会に向けての成果の発信」は、高等研全体の重要な課題として共通認識を持つ必要がある。2024年度においても引き続き、効率・効果的な広報展開を実施することとともに、高等研の事業活動を広範に訴求することにより、更なる寄付や外部資金獲得に繋げる努力を行うこととする。

1. 2023年度年次報告書「アニュアルレポート2023」の発行

例年通り2023年度年次報告書「アニュアルレポート2023」を2024年7月に発行した。

発行に際しては、引き続き、記載内容の充実を図る一方で経費削減に繋がるように編集方法及び発行手法の見直しを図った。発行部数は2022年度版と同様に2,500部、送付先は約1,100件とした。

2. 「けいはんな広報ネットワーク企画会議・記者懇談会」参画によるけいはんな学研都市全体の広報活動への貢献

けいはんな学研都市における各立地研究機関が情報交換を通じて広報力を高め、相乗効果を生み出す仕組みとして、広報担当者による「けいはんな広報ネットワーク企画会議」が2016年2月に発足し、原則として毎年2か月に1回の頻度で開催されている。

さらに、立地機関が協力して実施する取り組みとして、学研都市を中心に活動する各新聞社等の報道メディアの記者との意見交換を行う「けいはんな広報ネットワーク記者懇談会」が、企画会議の開催に併せて開催され、この場を記者発表の機会としても捉え、各立地機関からの情報提供に積極的に活用している。

第1回：4月16日（火）於NTT CS研究所

記者懇談会参加メディア：11社15名

交流事業に係る2件を情報提供

第2回：6月27日（木）於けいはんなプラザ

記者懇談会参加メディア：8社11名

交流事業に係る3件を情報提供

第3回：9月11日（水）於ATR

記者懇談会参加メディア：10社15名

交流事業に係る2件を情報提供

第4回：12月11日（水）於同志社大学京田辺キャンパス

記者懇談会参加メディア：9社11名

交流事業に係る3件を情報提供

第5回：2025年3月4日（火）於KICK

記者懇談会参加メディア：9社14名

交流事業に係る3件を情報提供

『5』他機関との連携活動

1. けいはんな万博2025への取り組み

大阪・関西万博との連携を図る取り組みとして、2022年5月に「けいはんな万博全体構想」が策定され、同年10月の「けいはんな万博準備会発足」を経て、2023年11月9日に「けいはんな万博運営協議会」が組織され、共同代表に松本紘所長が就任した。

けいはんな万博2025の開催テーマは「未来社会への貢献～次世代への解～」とし、

2025年4月から10月の期間を中心に、4つのフェスティバル（「ロボットアバターICT」「ウェルビーイング」「スタートアップ」「サイエンス&アート」）や国際会議をはじめ様々な催事を展開する。高等研は運営協議会の幹事およびサイエンス&アート部会のリーダーを務め、開催準備に協力した。

- けいはんな万博キックオフイベント：6月3日（日）グランフロント大阪
- けいはんな万博運営協議会総会：6月17日（月）けいはんなプラザ
けいはんな万博運営協議会総会：2025年3月12日（水）けいはんなプラザ
- けいはんな万博幹事会：5回開催（4月23日、6月26日、8月6日、
2025年1月28日、3月6日）
- けいはんな万博事務局会議：23回開催（4月5日、4月19日、5月17日、
5月31日、6月28日、7月12日、7月26日、8月9日、8月23日、9月6日、
9月20日、10月11日、10月25日、11月8日、11月22日、12月6日、
12月20日、2025年1月10日、1月24日、2月7日、2月21日、3月7日、
3月21日）

2. けいはんな万博2025 プレイベントの開催

- 国際高等研究所40周年念国際シンポジウムとして開催
- メインテーマ：「不確実性とともに生きる一次世代への鍵」
- 主催：高等研とけいはんな万博運営協議会との共催
- 開催日時：11月30日（土）
- 会場：国際高等研究所レクチャーホール
- 内容：AIやテクノロジーが急速に進化しているが、未来は依然として不確実である。基調講演として宇宙物理学者マイケル・フィンケンタール氏、素粒子物理学者橋本幸士氏が登壇し、「不確実性」のテーマに迫る。後半のパネル討論では、高等研から松本紘所長と、科学哲学・教育哲学の観点からAIと人間の未来を研究する鈴木晶子主席研究員も加わり、人類の未来を見据え、今何をすべきかを参加者と共に考える。

・基調講演1

- 講師：マイケル・フィンケンタール米ジョンズ・ホプキンス大学名誉教授
- 講演テーマ：「複雑性が支配する世界で不確実性とともに生きる—AIは助けになりうるか？」 “Living with uncertainty in a world dominated by complexity-can AI help?”

・基調講演2

- 講師：橋本 幸士京都大学大学院理学研究科教授
- 講演テーマ：「学習物理学の創成」 “Foundation of "Machine Learning Physics"
- 参加者：会場参加54名、オンライン参加者78名、計132名

II. 法人運営

『1』評議員会、理事会の開催状況

2024年度における評議員会及び理事会の開催実績は、下記のとおりである。

1. 評議員会の開催

- 第94回評議員会 2024年 6月 14日 ホテルグランヴィア京都5階「古今の間」
- 第95回評議員会 2024年 9月 30日 （決議の省略）
- 第96回評議員会 2024年 3月 25日 京都経済センター4階「4-D」会議室

2. 理事会の開催

- 第138回理事会 2024年 5月 15日 都ホテル京都八条地下1階「深草の間」

第 139 回理事会	2024 年 6 月 14 日	ホテルグランヴィア京都 5 階「古今の間」
第 140 回理事会	2024 年 6 月 30 日	(決議の省略)
第 141 回理事会	2024 年 12 月 9 日	京都経済センター 4 階「4-E 会議室」
第 142 回理事会	2022 年 3 月 10 日	京都経済センター 4 階「4-E 会議室」

『2』松本紘所長の任期満了に伴う所長選考について

松本 紘 所長が 2025 年 3 月 31 日を以って任期満了を迎えるのに際して、所長選考規程に基づき、2025 年 2 月 28 日に所長選考委員会を開催した。その結果、所長選考委員の全会一致により、現所長の 松本 紘 氏の再任案が決定した。

本委員会の選考結果が、2025 年 3 月 10 日に開催された第 142 回理事会に上程され、下記のとおり松本紘所長の再任が決議された。任期は 2025 年 4 月 1 日から 2 年間
公益財団法人国際高等研究所第 8 代所長（再任）：

松 本 紘 公益財団法人国際高等研究所所長
国立大学法人京都大学第 25 代総長
国立研究開発法人理化学研究所名誉理事長

『3』高等研施設の利用促進

文化学術研究の推進など法人の公益目的に資するイベント、セミナーなどについては、外部の研究機関・大学・企業などに積極的に働きかけて、高等研施設の提供を図ることとともに、けいはんな万博の来場者の拡大に貢献することを目指す。

- 京都大学 ELP（エグゼクティブ・リーダーシップ・プログラム）
：6 月 8 日（土）～6 月 9 日（日）
- 国際協力機構（JICA）松本塾　　：9 月 16 日（月）～20 日（金）
- 京都スマートシティーエキスポ 2024（京都府）レセプション
：10 月 3 日（木）
- 日本アスペン研究所（ヤング・エグゼクティブ・セミナー）
：11 月 22 日（金）～11 月 24 日（日）
- 第 4 回けいはんな学研都市「大学・研究機関」共創会議
：12 月 13 日（金）

『4』資産運用委員会における審議

2024 年度（令和 6 年度）資産運用執行状況については、資産運用委員会における審議を経て、償還された証券について下記のとおり再運用を行った。

1. 2024 年度 再運用（証券購入）額 144,648 千円

資産運用委員会	購入銘柄	購入金額
第 66 回 (2024.8.6)	アルトリア・グループ株式	48,544 千円
	ファイザー株式	47,932 千円

	ダウ株式	48,172 千円
	合計	144,648 千円

III. 2024 年度（令和 6 年度）収支決算

『1』 資産運用について

1. 運用結果

	2024 年度	2023 年度	増 減
運用資産額 (注)	3,996 百万円	3,927 百万円	69 百万円
運用益	142 百万円	129 百万円	13 百万円
利回り	3.6%	3.3%	0.3%

(注) 基本財産と特定資産のうち運用資産の合計

2. 運用資産の構成比率（2025.3.31 時点）

	金額 (百万円)	比率 (%)	備考
国内債券	850	21.3	
国内株式	1,251	31.3	
外国債券	1,185	29.6	
外国株式	485	12.1	
オルタナティブ資産	219	5.5	J-REIT
預金	6	0.2	
合計	3,996	100.0	

3. 運用資産額の増加

運用資産額の増加は、株式の評価益（123 百万円）が、債券の評価損（△49 百万円）およびオルタナティブ資産の評価損（△5 百万円）を上回ったことによる。

4. 運用益の増加

運用益の増加は、日米の金利差を勘案し、比較的利回りの高い外国株式（ドル建て株式）の構成比率を増やしたことによる。

『2』貸借対照表

1. 資産の部

資産合計額は 5,278,656 千円で前年比 42,082 千円増加した（議案第 2 号 1 ページ①）。

主な要因は基本財産の評価額の増加（122,249 千円、同②）、現預金など流動資産の増加（28,239 千円、同③）等の資産の増加が、運用資産の評価額の減少（52,789 千円、同④）、建物および付属設備の減価償却（52,545 千円、同⑤）、研究基金資産取崩し（19,000 千円、同⑥）等の資産の減少を上回ったためである。

2. 修繕積立資産

将来の大規模修繕に備えるために、修繕積立資産として、流動資産の現預金より 14 百万円（同⑦）の振替を行い、積立金額は 38 百万円（同⑧）となった。2025 年度以降も、継続して修繕積立資産の積立てを目指す。

『3』正味財産増減計算書

1. 経常収益

経常収益は 181,928 千円で前年比 1,207 千円減少した（議案第 2 号 2 ページ⑨）。

主な要因は、運用益は増加（13,224 千円、同⑩+⑪）したが、受取補助金等の減少（3,128 千円、同⑫）、雑収益の減少（12,766 千円、同⑬）などが生じたためである。

2. 経常費用

経常費用は 191,361 千円で前年比 9,017 千円増加した（同 3 ページ⑭）。

主な要因は、昇給等による給与手当の増加（2,971 千円、同⑮+⑯）、イベント開催等による諸謝金の増加（3,144 千円、同⑰）、会議費の増加（1,830 千円、同⑱+⑲）および委託費の増加（2,233 千円、同 3~4 ページ⑳+㉑）などである。

3. 当期経常増減額

経常増減額はマイナス 8,979 千円で前年比 10,277 千円減少した（同 4 ページ㉒）。

ただし、支出を伴わない減価償却を除いたキャッシュフロー収支はプラス 42,088 千円である。このうち 14,000 千円（同 13 ページ㉓）を修繕積立資産として積立てるため、次年度への繰越金は 28,088 千円増加し、103,543 千円（同㉔）となった。

以上